

四項を加え、タイ正月 Songkran がビルマの正月 Thingyan を語源としている等文化交渉の資料を豊富に与え、類書の少ないこの方面にあって甚だ便利な概論として一読をすすめたい好著である。

(工藤成樹)

McVey, Ruth (ed.): Indonesia. Southeast Asia Studies, Yale University (By arrangement with Hraf Press). 1963. pp. 471

本書は、Human Relations Area FilesのSurvey of World Cultures シリーズの一冊であるが、インドネシアについて、同シリーズから出版された旧版(全三巻)の内容とは、かなり趣をことにしている。旧初版は、1956年に、Stephen W. Reed によって編集され、1959年には、John Cookson などにより改訂されている。いずれも限定版であり、内容も百科全書的で、貴重な資料を含んではいるが、現代インドネシアの複雑な諸問題を理解するためには、欠ける所が多い。しかし、本書は、問題重点的にインドネシア全体の分析概観を試みている諸論文によって構成されている。執筆者も地理学の Karl J. Pelzer. 人類学の Hildred Geertz, 華僑研究の G. William Skinner, 経済史の Douglas S. Paauw, 労働問題の Everet D. Hawkins, 歴史の Robert van Niel, 政治史の Herbert Feith, 文学の Anthony H. Johns, 芸術の Mantle Hood と、夫々の分野の専門家が担当しているほか、本書の内容に関するコンサルタントを見ても、Henry J. Benda, John M. Echols, Clifford Geertz, Benjamin Higgins, Claire Holt, George McT. Kahin, J. D. Legge, Daniel S. Lev など、アメリカの現代インドネシア研究の総力を結集した観さえある。

若干の論文の内容を紹介してみよう。Pelzer の自然・人的資源に関する論文は、気象と植物資源の関係、鉱物資源の分布、貯蔵量や人口の増加、移動、分布について論じ、中でも前世紀の人口増加は、衛生状態の改善によるよりも、人口調査技術の発達によるとの指摘は、興味深い。Geertz の文化についての論文にも、インドネシア全体を統一的に概観する努力が見られ、特に文化の地域的、階層的な違いを、大都市の metropolitan super culture と新中産層や農民の文化の対比において、統一的に理解しようとする試み

は、インドネシア社会全体の基礎構造を理解する上に、有益な方法と考えられる。Skinner の華僑に関する論文で注目されるのは、華僑分布の概数であろう。この問題には、土着文化への華僑の同化の程度が当然ひっかかる。同化の程度と内外の政情変化にともなう華僑の政治志向との関連の分析も、示唆する点が少ない。農業については、Pelzer が執筆しているが、新しい資料にもとづき、農地と農産物、人口と土地所有の問題などが取り上げられ、未だ重要な経済活動であるインドネシアの農業の発展のためには、政府による組織的、科学的技術の導入が必要であると、Pelzer は主張する。Paauw は、植民地経済体制から「指導された経済体制」(Ekonomi Terpimpin)までの推移過程を多角的に論じ、Hawkins は、民族主義運動の指導期より重要な役割を演じた労働組織にまつわる諸問題を論じ、労働組織は、比較的安定しているものの、労働意欲の低いことが、今後の問題の一つとなるであろうことを指摘している。

いずれも、現代インドネシアを理解する上に有益な力作ばかりである。
(口羽益生)

Geertz, Clifford: Peddlers and Princes, Social Change and Economic Modernization in Two Indonesian Towns. The University of Chicago Press, Chicago and London. 1963. pp. 157

伝統社会から、経済が比較的優位を占める近代社会への移行過程が、抽象レベルの高い二分法(伝統主義対合理主義など)によって理解される時、屢々伝統社会内部の特殊性は無視され勝ちである。しかし、伝統社会の内容は、必ずしも一様ではない。「伝統」から「近代」への変容過程は、「伝統」の在り方によって成り異なっている。この事実を視角を合せて、Geertz は、本書で、東部ジャワの Modjokuto (仮名) 町とバリ島南西の Tabanan 町を比較する。夫々の町の特徴を巧みに浮き彫りにした鮮かな筆致による比較叙述の仕方も大いに参考になるが、一国の経済発展の理解のために、特定地域の集約的研究は、どのような方法で貢献し、又どのような点に着眼すべきかなどに関する彼の卓見は、同様の問題に関心を持つ者にとって、極めて有益である。

Modjokuto に関する Geertz の秀れた諸研究は、

周知の通りであるが、Tabanan における彼の調査結果は、*American Anthropologist* に掲載された一論文を除いては、未だ公表されていない。本書では、この二つの調査結果が比較される。いずれも独立後、急速に変容しつつある町である。前者では、Bazaar 型経済体制を背景とするイスラム商人 (Peddlers) が、新しい企業体制への移行に主導権を握っているのに対し、後者では、独立後、中央より任命された新しい官吏層のために、政治的エリートとしての地位より転落した旧貴族 (Princes) が、企業経営に乗り出している。両者は夫々、sub-dominant elite としての地位を築きつつあるが、彼らの社会的・文化的背景は目立って異なっている。

Modjokuto のイスラム商人は、地方紳士階層と農民を主体とした伝統社会においては、やや疎外された地位に置かれていた。しかし、彼らの社会では、イスラムを支柱とする禁欲的倫理や個人主義的、普遍主義的世界観が支配的であった。その点、新しい企業づくりの上で、彼らが必要とするものは資本や世界観ではなく、効果的な企業「組織」形成の能力である。これに対し、多分に復古主義的傾向のある Tabanan の旧貴族は、伝統文化のエリートとしての地位を巧みに利用して、旧態の人格関係に基づく古い組織を新しい企業組織に切り替えるのに、余り抵抗を受けていない。唯、古い個別関係主義的献身を土台として築かれた企業組織が、十分な適応力を持ち、能率をあげるように作用しうるか否かに問題が残る。

新しい企業組織を形造る過程が、夫々の社会の伝統の内容の違いによって異なることを、Geertz は詳細に分析する。しかし、このような違いは、無限に異なった形を持つものではなく、そこには一定の規則性が見出されるに違いないという確信に基づいて、彼は最後に六つの興味ある仮説を提示している。

(口羽益生)

Geertz, Clifford (ed.): Old Societies and New States, The Quest for Modernity in Asia and Africa. The Free Press of Glencoe, London. 1963. pp. vii + 303

本書は、シカゴ大学の「新興諸国の比較研究委員会」のメンバーによる最初の論文集である。この委員会は、1959-60年度に作られ、Edward A. Shils を議

長とし、McKim Marriot, David Apter, Clifford Geertz, Lloyd Fallers, Max Rheinstein, Mary Jean Bowman, C. Arnold Anderson, Robert Le Vine によって、運営され、比較を通じて、新興国に共通な社会政治現象の基底に横たわる諸問題を、大学院学生や訪問教授をもまじえたセミナーにおける討議を通じて、社会学的に理解する点に目標を置いている。

本書の副題も示すように、本書の研究対象となる地域は、東南アジアのみに限定されるものではないが、東南アジアにおける新興国に共通な社会的諸問題を比較展望によって理解するために、本書は若干の有益な示唆を与える。しかし、この種の論文集の常として、掲載論文が、必ずしも、総て、一様に所期の目的を充分達成しているとは言い難い。

上記九人の学者によって、夫々取挙げられたテーマは、新興国の比較研究、文化政策、政治的宗教、統合的革命、民主制、法、教育、変動の八つである。より一般的な問題から特殊なものに深化するという方法が採用されている。これらの論文の内、若干のものを紹介するならば、Shils の比較論は、新興国にユニークである共通問題の比較研究の社会学的意味やその視点を取扱っている。新興国にとって共通な問題とは、民族解放という共通な状況における経験より生ずるもので、具体的には、伝統的な農民社会において自国民による近代的行政体の確立とその正当化の政治過程に生ずる問題、近代的経済導入のための国民の説得と教育、知識人と大衆の間に見られる教育的、社会的懸隔、国民の威厳の問題としての伝統と近代教育の融合統一、伝達用具としての言語の統一、文化や経済的利益に絡む地域的対立と国家的統一の問題などである。Marriot の文化政策についての論文も新興諸国の理想主義的傾向を規定する国内的、国際的諸要因を指摘していて、興味深い。例えば、インドにおける仏教の復活は政治的エリートによる国内的統一と国際的威信の獲得のための意識的文化操作と見る。同様の問題をセイロン、パキスタン、インドネシア、アフリカについて検討している。又 Geertz は、新興国の形成過程には、常に、文化的社会的原生主義 (primordialism-tribalism, parochialism, communalism, racism, regionalism などの総称) を打破する統合的革命が見出され、それには幾つかの型がある点を比較によ